

パリ、ビュシ通りにて

ビュシ、ブシコー、ブローニュ、ヴァンセンヌ、バニョレ、ヴァンヴ、ブランシュ、ボワツシエール、ビュットショールモン、ベルシー……、パリ市内に存在する駅や通りの名。バ行の響きというのは、どうしてまた遠いヨーロッパの響きを運んでくるのだろうか。ジャジュジョ。ベルレーヌの詩をかじった者のように、鼻にかけて発音するあの「ヴィオロン」のパリ。

左岸は知識人文学エリア、右岸は商売労働エリア、とは誰が言い始めたのか知らない、特色はあるだろうがそんなに大まかなわけ方はしない。駅が変われば集まる人種も店構えも違ってくる。東京23区を無理やりパリ20区のエリアにあてはめ比較しているガイドブックを目にしたことがある。これはあまり愉快ではない。歩く前に決まった観念を持ってしま

と面白みが半減する。パリは世田谷区の大きさです、と言われればますますだ。

オデオン、マピオン、サン・ジェルマン・デ・プレ界隈は昔から大学、出版社、ギャラリー、カフェに埋めつくされ、アカデミックな社交の場としての役割を十分に担ってきたという。サルトルやヘミングウェイが通ったカフェやブラスリに入れば、それだけで気分が高揚してしまうスノッブな空気が充満している。スノビズム(紳士気取り、俗物根性、えせ、きざっぽい、スノベ動詞)人を見下す、ということになる。虚栄心のかたまりをそこにぶつけければ、誰もがえせの快楽に瞬時浸れる。

たとえば、当時サルトルやボーヴォワールなどの文学者が文学議論を交わしていたというレ・ドウ・マゴで1杯7ユーロのキールを飲み、正面のひなびた姿のサン・ジェルマン・デ・プレ教会を見上げながら隣のジャーナリスト風の中年男性の会話を横見し、わかったふりをしながら、隣でかたくなっている観光客に冷やかすような視線を送る。ギャルソンにいたっては、気取りコンテストでグランプリをとったようで、笑顔もウインクもむろん挨拶もないが、そこでしよげることなく堂々と椅子に深く腰を掛け、



誰かを待っているふりをしつつ小説を片手に遠くを見る。

はじめのそんな自意識過剰で不自然な態度も、そこらじゅうの誰もが自己に埋没しているだけに見えてくると、しだいに肩が軽くなる、ような気がする。気がするだけであるかもしれないところが、やはりスノツブな空間にいる証になるのだろう。

ビュシ通りはオデオン駅近くサンジェルマン大通りから一本入った細い一角で、ここはカフェ、パン屋、本屋、レストランが、これでもかと歩道にはみ出て並んでいる。スーパーや八百屋、朝には市場も並び、スノツブさと大衆的な親しみが混在している通りでもある。

一回だけでいいからこの通りで食べたい、という連れと昼時、花屋の向かいの意外に単純な名前のカフェテラスに座る。「カフェ・ドゥ・パリ」。さつそく無愛想な店員と目が合う。テラスは日光を浴びながら食べる人であふれ返っている。通りがかりの人々を眺める楽しさというのは、スノツブな象徴のように思える。どこかで品定めし、自意識と無意識の間に立つ自分と比べている。

真向かいのレストランからは英語や外国語が聞こえる。ちらちらと通り

を見ながらフォークとナイフを握り締める短パンTシャツ観光客の歓喜と興奮した顔を見ていると、アカデミックだとか知識人だとか洗練だとかいう単語とは関係なく、ただうかれ幸せそうな顔だけが映し出されているのがわかる。ここは別に吉祥寺でもなく、下北沢でもない、六月某日のビュシ通りのにぎわいなのだ。食べたオニオンスープは案外おいしく、ぎらぎらする太陽と通りをゆく人間の見物と、そして俗物さを合わせて9ユーロ。高くはないだろう。

ヴァヴァ、イケヴクロ、アキハヴァラ、シンヴァシ、エヴィス、シヴヤ
……。

